

日本陸水学会北海道支部会 第2代会長 橋治國先生のご逝去を悼む

石川靖（道総研，エネルギー・環境・地質研究所（支部会 第3代会長））

日本陸水学会北海道支部会の設立の立役者で、支部会第2代会長でありました橋治國先生（元北海道大学助教授）が、令和5年10月31日ご逝去されました。享年80歳でした。橋先生のご経歴や活動の一端を披露し、業績を回顧して故人を偲びたいと思います。

先生は、昭和18年に千葉県成田市でお生まれになり、お父様の仕事の関係で奈良に転居し、国立奈良女子大学文学部附属小から同中学校、同高等学校へ進まれました。昭和37年、北海道大学に進学、工学部衛生工学科をご卒業後、同大学院に進学、大学院後期課程在学中に、北海道大学工学部助手に採用され、様々な研究成果等を積み上げ、「水域の富栄養化に関する基礎的研究」により博士号を授与されるに伴い助教授に昇進され、2007年3月31日をもって定年退職なされました。

衛生工学を専攻されたので、研究者としての始まりは汚染水処理による水質浄化の研究¹⁾に取り組んでいました。その後、元々北海道の自然にあこがれて北海道大学に進学したこともあり、環境保全、環境再生のために陸水学の視点でのアプローチにより陸水を俯瞰した研究に取り組みます。対象は国内外の湖沼、河川、ダム湖、積雪、湿原、地下水とあらゆる方面²⁻¹³⁾に及び、物質では「リン」の挙動について常に重要性を重んじて話題提起、研究報告等を行っていました。

学術的成果は言うに及びませんが、先生の功績として忘れてはならないのは、多くの研究者、技術者を育成したことです。元々は後藤新平の言葉ですが、プロ野球の野村克也の座右の銘という事で一般的に有名となった「財を遺すは下、仕事を遺すは中、人を遺すを上とする」という言葉があります。この中の「人を遺す」を常に実践していました。学術面の実績や信頼があるということだけではなく、独特の奈良弁で人を包み込みながらもいつの間にか、何かの新しい方向を周りに示唆するような巧みな話術は、人に信頼され、慕われていました。衛生工学科、北大に限らず、官民、国内外の研究者とのネットワークの幅広さにつながり、告別式では海外から多くの弔電を頂いていました。かく言う私も、いつ

の間にかそのネットワークに組み込まれ、3代目の支部会会長に就任したのは、巧みな押し引きと粘り強い交渉術で説得されたためだったと記憶しております。

日本陸水学会を札幌で開催した第61回大会（1996年）では総務幹事長、第73回大会（2008年）では大会（実行）委員長として、経験の浅い大会スタッフにも的確な指示と方向性を示し、大会を成功裏に収めたのも持ち前のリーダーシップと責任感によるのは間違いないところです。

大学退職後も民間企業に籍を置き技術指導をすることに飽き足らず、2013年にNPO法人（水圏環境科学研究所）を立ち上げました。知己の研究者を北海道に招へいし、講演を通して若い世代の陸水研究者への技術還元や研究への知的刺激を促しました。

一方で、58歳に発症した脳梗塞の後遺症と常に闘いながらも、そのことをおくびにも出さず、亡くなるまで淡々かつアグレッシブに研究や指導等に取り組んでいました。

橋先生が生涯を通じて取り組んだ研究テーマは、退職を控える中で第8回の支部会（2006年12月開催）において講演していただいた題名「水環境保全と水質学—河川・湖沼・湿原水環境の水質解析」が体現していると思います。残念ながらこの時の講演要旨的なものは記録として残っておりません。聴講した私が陸水学会誌に支部会報告として掲載した文¹⁴⁾を再掲します。「橋先生が2007年3月で定年退職されることから、総会後に特別講演、これまでの北大在職時における研究のみならず教育面も含めてこれまでの道のりについてお話していただきました。（中略）フィールド研究に携わる研究者は「現場にこそ答えあり」という姿勢は、昨年吉田先生のお話とも通じるのがあるように思いました。時間と根気を必要とするこのような研究手法で取り組む研究者が次々と大学を去り、引き継ぐ者が減っている現状は、昨今の評価、成果主義が厳しさを反映しているように感じます。このことが、将来的に陸水学として重要な1つの柱の停滞を招くと思うのは筆者だけでしょうか。支部会のみならず陸水学会自体も会員が減少し、フィールド研究とし

ての陸水学が停滞しているような状況について内心は本意無い、虚しさがあったのかもしれませんが。それが逆に退職後も研究意欲が衰えることなく、周りを巻き込んでの支部会やNPO活動等を進める源泉となったのでしょう。

ここまで述べたことは、橘先生の研究者人生の極々一端にすぎません。先生は北海道における陸水学や水環境研究の分野において多大な有形、無形の資産を残されました。それを私たちがどう引き継ぎ、次代へ継承していくか、重い宿題を託し、ご両親がいる墓所で深い眠りにつきました。

改めて今日までのご厚情に感謝いたしますとともに、ご冥福をお祈りいたします。

参考文献

- 1)橘治国(1970):し尿消化処理施設における高速散水ろ床生物膜の基礎的研究.衛生工学,17:65-74.
- 2)橘治国・吉田邦伸・井上隆信(1996):都市近郊湖沼(茨戸湖)における栄養塩の形態と藻類増殖.水環境学会誌,19:132-139.
- 3)橘治国・堀田暁子・南出美奈子・斉藤寛朗・川村哲司(1996):高層湿原およびその周辺水域の水質環境.水環境学会誌,19:910-921.
- 4)橘治国・清水達雄・中川佳久(1996):石狩川の融雪期水質:水文・水資源学会誌,9:444-456.
- 5)橘治国・井上隆信(1996):浅い湖沼における沈降物量の評価.陸水学雑誌,57:163-171.
- 6)橘治国・原文宏(1998):春の雪捨て場の雪山はどうしてあんなに汚れているのですか?.雪氷,60:182-184.
- 7)橘治国(1998):地域通信<北海道地方>石狩川の水質と流域水管理.水資源・環境研究,11:51-54.
- 8)橘治国・山田俊郎(2000):森林河川の栄養塩流出負荷特性とその下流域生態系への影響.地球環境研究,47:7-22.
- 9)Rofiq IQBAL, Stefan HOTES, Harukuni TACHIBANA(2005):Water Quality Restoration after Damming and Its Relevance to Vegetation Succession in a Degraded Mire:土木学会論文集,790:59-69.
- 10)Harukuni TACHIBANA, Rofiq IQBAL, Saori AKIMOTO, Mutsuko KOBAYASHI, Syunji KANIE, Akio MORI, Tadaoki ITAKURA, Hidenori TAKAHASHI, Kohken UTOSAWA, Nyoman SUMAWIJAYA, Salampak DOHONG, Untung DARUNG, Suwido LIMIN(2006)Chemical characteristics of water at the upper reaches of the Sebangau River, Central Kalimantan, Indonesia (Special issue of proceedings of the international symposium on long-term ecological research "land management and biodiversity in Southeast Asia, Bali, Indonesia, 17-20, September 2002"):Tropics,15:411-415.
- 11)辰巳健一・神和夫・橘治国(2006):豊平川におけるヒ素の動態と流域管理.水環境学会誌,29:671-677.
- 12)編集代表橘治國(1998)積雪寒冷地の水文・水資源,東京,隼信山社サイテック
- 13)日本分析化学会編 (2005)水の分析第5版,東京,化学同人
- 14)北海道支部会 2006年活動報告(2007):陸水学雑誌,68:207.